研究主題

資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方に関する研究（１年次）

－「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通して－

【２年研究】

中学校・高等学校　国語科

【研究担当者】早川　貴之　　横田　昌之
【この研究に対する問い合わせ先】
TEL 0198-27-2735　FAX 0198-27-3562
E-mail kyouka-r@center.iwate-ed.jp

研究の目的

平成 28 年 8 月，中央教育審議会教育課程企画特別部会は，次期学習指導要領の基本的な方針について「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（以下「審議のまとめ」という。)」(2016）にまとめました。また，同 12 月に「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）（以下「答申」という)」(2016）を出しました。

それらの中で，次期学習指導要領について，子供たちの現状と課題を踏まえつつ，人間が学ぶことの本質的な意義や強みを改めて捉え直し，一人一人の学びを後押しできるよう，これまでの改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しに留まらず，「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」までを見据えて改善を図る方向性が示されています。

また，「何ができるようになるか」という観点から整理された育成を目指す資質・能力（以下「三つの柱」という。）をバランスよく育むためには，「何を学ぶか」という指導内容等の見直しとともに，それらを「どのように学ぶか」という子供たちの具体的な学びの姿について「アクティブ・ラーニング」の視点からの見直しが欠かせないものとしています。

こうした流れを受け，本研究では，「三つの柱」を総合的に育むことを目指し，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善の考え方について，授業改善の方策を構想し，実践を通して検証すること，ただし，指導法を一定の型にはめ狭い意味での授業方法や授業技術の改善に終始しないようにすることに留意し，提示していきたいと思います。

研究の「キーワード」

○資質・能力を育む学習過程

・「活動あって学びなし」になることを避けるため，「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」を一体として捉え，活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示した「資質・能力を育む学習過程例（読むこと)」を提示します。

○「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習活動

・「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて，授業改善の三つの視点をもとに，具体的な学習活動の例について提示します。

○「見方・考え方」の構造

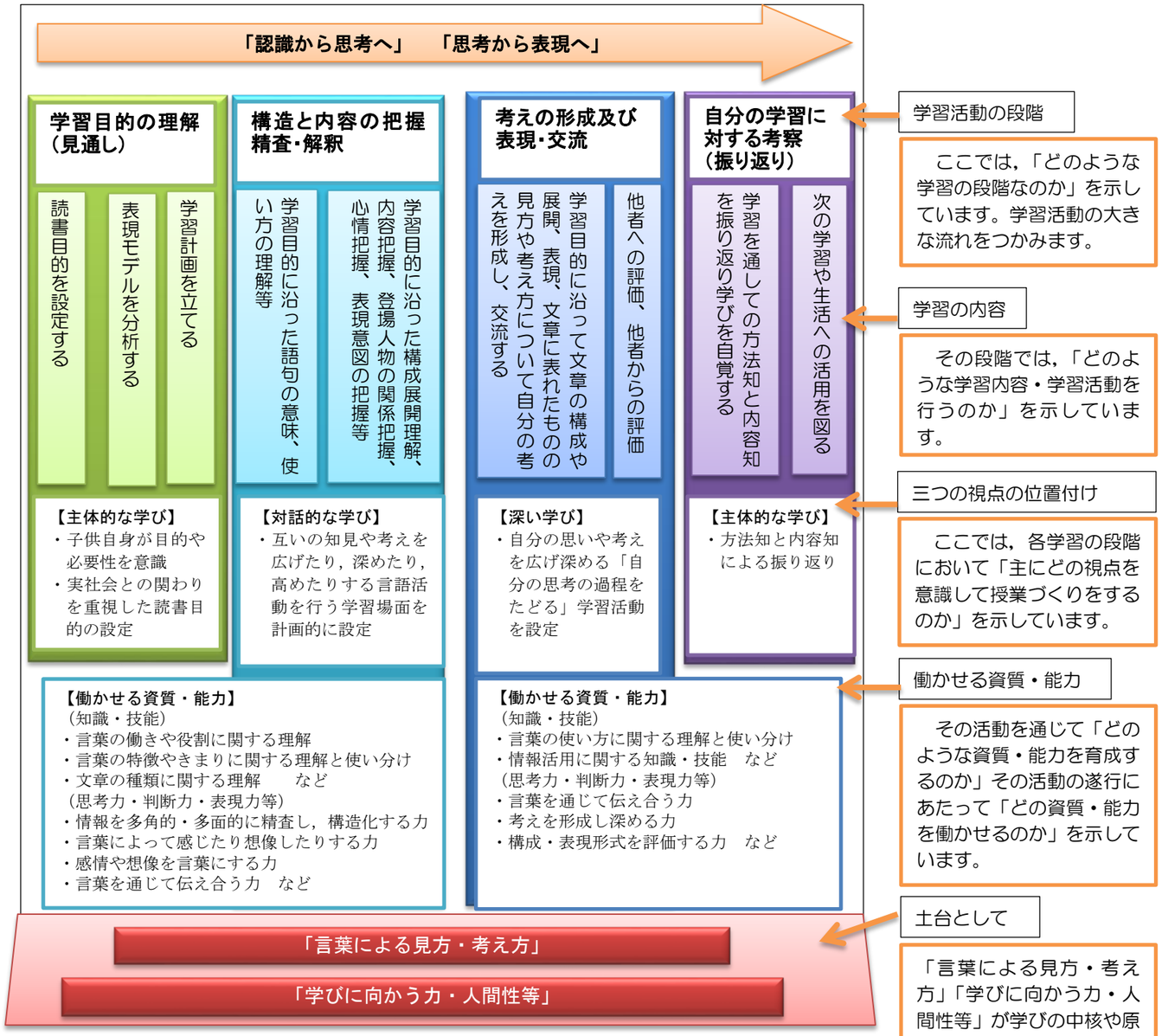
・「答申」(2016）には，各教科等の特質に応じた「見方・考え方」が示されています。「見方・考え方」は，将来にわたって使い続ける「道具」のようなものだと考えています。だからこそ，生徒たちが十分に使いこなすことができるようにしていかなければなりません。

「言葉による見方・考え方」を国語の学習でどのように働かせていけばよいのか，具体の単元に当てはめた場合の例とその構造を提示します。

資質・能力を育む学習過程

「答申」(2016) では，学びの過程の考え方について，「ただ活動するだけの学習にならないよう，活動を通じてどのような資質・能力を育成するのか」「言語能力の働く過程の整理を踏まえ，『認識から思考へ』という過程の中で働く理解するための力や，『思考から表現へ』という過程の中で働く表現するための力が，各領域の中で，主にどこで重点的に働いているのか」を示すとしています。

言葉による「見方・考え方」と「学びに向かう力、人間性等」を土台としての，学習活動の段階や学習内容における「アクティブ・ラーニング」の三つの視点の位置付け，学習活動内で働かせる，資質・能力について整理し，本研究の基本となる学習過程例（読むこと）を【図１】に示します。



学習活動の段階

ここでは，「どのような学習の段階なのか」を示しています。学習活動の大きな流れをつかみます。

学習の内容

その段階では，「どのような学習内容・学習活動を行うのか」を示しています。

三つの視点の位置付け

ここでは，各学習の段階において「主にどの視点を意識して授業づくりをするのか」を示しています。

働かせる資質・能力

その活動を通じて「どのような資質・能力を育成するのか」その活動の遂行にあたって「どの資質・能力を働かせるのか」を示しています。

土台として

「言葉による見方・考え方」「学びに向かう力・人間性等」が学びの中核や原動力となることを示しています。

【図１】資質・能力を育む学習過程例（読むこと）
（「答申　別添資料」（2016）P.5　を参考に三つの視点の位置付け等を加えて作成）

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習活動

「答申」(2016) において示されている国語科における「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を実現する学習・指導の改善・充実の視点は，【表１】の通りです。本研究におけるそれぞれの視点の実現に必要な学習活動の例を考え，【表１】の右に示しました。

【表１】「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて（「答申」(2016) P.130-131　より作成）

		学習活動の例
「主体的な学び」の実現に向けて	○子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう，学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場面を計画的に設けること ○子供たちの学ぶ意欲が高まるよう，実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として，子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすること ○学習を振り返る際，子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ，説明したり評価したりすることができるようになること	○一次の充実を目指した単元構想等を設定する。 「読書目的の設定」 「表現モデルの分析」 「学習計画の立案」など ・魅力的な表現モデルの提示 ・課題を遂行のために必要な力と課題を遂行することによって身に付く力の分析と，それを定着させるのに有効な学習計画 ○単元に実社会や実生活との関わりを重視した課題解決的な言語活動を位置付ける。 ・本時のゴールが明確な学習課題 ・単元のゴールと言語活動の関連が見える学習課題 ○振り返りの方法，視点，活用の充実を図る。 ・振り返りシート等の使用 ・学びの方法（方法知）と内容（内容知）についての子供自身の自覚
「対話的な学び」の実現に向けて	○子供同士，子供と教職員，子供と地域の人が，互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや，本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して，互いの知見や考えを広げたり，深めたり，高めたりする言語活動を行う学習場面を計画的に設けること	○他者との議論や協働等が充実する単元構成を設定する。 ○子供たちがお互いの立場や存在を尊重し，相手や目的，条件などを踏まえて表現する学習活動を設定する。 ・対話による学習効果（メリット）の共有 ・対話の相手や時間など学習者による何らかの判断や選択
「深い学び」の実現に向けて	○「言葉に対する見方・考え方」を働かせ，言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けること ○子供自身が自分の思考の過程をたどり，自分が理解したり表現したりした言葉を，創造的・論理的思考の側面，感性・情緒の側面，他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して，理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めること ○思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすること	○自分の思いや考えを広げ深められる単元課題を設定する。 ○思考の過程をたどることができる単元構成を設定する。 ・共通教材⇒並行読書材 ・共通教材での表現⇒共通教材での再表現

「見方・考え方」の構造

言葉による「見方・考え方」を次のような文脈で理解すると，学習活動を考えやすくなります。

どんな目的で	自分の思いや考えを深めるため，
何と何の関係を	対象と言葉、言葉と言葉の関係を，
どんなことに着目して	言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え，
どう意味付けしていくのか	その関係性を問い直して意味付けること

国語における言葉による「見方・考え方」を単元レベルで，目標（資質・能力）と関連付けて設定し，どういった「見方・考え方」を働かせようとしているのか，どういった「見方・考え方」が働き，「道具」として使えるようになるのかを授業者と学習者が共有することが大事になります。

例えば，「二つの新聞社説について，見出し・トピック・構成等を視点として共通点や相違点を捉える学習」の場合について，単元の目標と，言葉による「見方・考え方」と単元で働く「見方・考え方」の関係を【表２】で示します。

【表２】単元の目標と単元で働く「見方・考え方」の関係

	（対象）	学びに向かう力 人間性等	知識・技能	思考力・判断力・表現力等
単元の目標 （資質・能力）		文章を読んで自分や他の人の考えを広げたり，深めたりしようとしている。	文章の展開の仕方を捉え，内容の理解に役立てることができる。	二つの文章を比べ，共通点や相違点を言葉で表現することができる。 二つの文章を関連させて自分の考えをもち，言葉で表現することができる。
言葉による 「見方・考え方」		自分の思いや考えを深めるため，	対象と言葉，言葉と言葉の関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉え，	その関係性を問い直して意味付けること
単元で働く 「見方・考え方」	新聞社説の表現・内容に対する	自分や他の人の考えを広げたり，深めたりするため，	同一テーマの複数社説を「見出し」「トピック」「構成」「内容」に着目して捉え，	二つの社説を関連させることでそれぞれの特徴を見直して意味付け，言葉で表現すること。

研究のまとめ

【成　果】

○「主体的な学び」の実現に向け，一次の重要性が確認できました。表現モデルの演示や，指導者による解説が生徒の興味や関心を高めることに有効であることが確認できました。

○「対話的な学び」の実現に向け，生徒たちが目的や必要性を意識して取り組む対話とするため，生徒たちに対話の相手や時間など何らかの「選択・判断」をさせることが一つの有効な方法であることが確認できました。

○「深い学び」の実現に向け，単元で働く「見方・考え方」を構造的に捉え，それに基づいた単元の指導を展開することの重要性が確認できました。

【来年度に向けて】

完成年度である来年度は，今回構築した理論および単元の指導案等に則った実践に入ります。来年度は研究協力校および研究協力員，研究担当者による単元レベルでの実践を予定しており，その中で得られた知見の整理とデータの分析・検証を行い，「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を通しての資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業の在り方について，報告書並びにガイドブック等を通して広く普及していく予定です。

研究報告書とガイドブックは，下記の岩手県立総合教育センターのWebページに掲載しております。また，本研究総論も掲載しておりますので，併せてご覧下さい。http://www1.iwate-ed.jp/kankou/kkenkyu/172cd/h28ken.html